

祝もものき事務所

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

D 挿 口
T 画 絵
P

ハ
ン
ズ
・
ミ
ケ

睦
月
ム
ン
ク



祝もものき事務所

もも の き た ろう
百之喜太朗
事務所所長

登
場
人
物

か しょう いん おう か
花 祥 院 凰 華
人脈が武器の有能秘書



いぬ まき れんしょう

犬 槇 蓮 翔

百之喜の幼なじみ、格闘家



よし ざるあずさ

芳 猿 梓

百之喜の幼なじみ、舞台役者



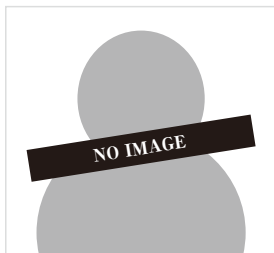


き せ た か し
黄瀬隆
江利の弟



つばき え り
椿江利
依頼人

- 吾藤田恭次 (ごとう だきようじ) 江利の婚約者
- 呉亜紀子 (くれ あ き こ) 黄瀬の恋人
- 渡邊三成 (わたなべみつなり) 黄瀬の上司
- 鬼怒川憲子 (き ぬ がわのり こ) 弁護士
- 小日向静 (こ ひなたしずか) 依頼人？
- 吾藤田夏子 (ごとう だ なつ こ) 将弘・恭次の姉
- 茨木愛衣 (いばらき め い) 将弘の元妻
- 吾藤田将弘 (ごとう だ まさひろ) 恭次の兄
- 吾藤田忠孝 (ごとう だ だたか) 夏子・将弘・恭次の父
- 吾藤田絃子 (ごとう だ ひろ こ) 夏子・将弘・恭次の母
- 吾藤田国重 (ごとう だ くにしげ) 忠孝の父
- 吾藤田菊枝 (ごとう だ きく え) 忠孝の母



ぎん こ
銀子

百之喜が恐れて止まない大家



き じ な しゅんすけ
雉名俊介
百之喜の幼なじみ、弁護士



おに みつ とも や
鬼光智也
百之喜の幼なじみ、公務員

1

江利はその扉の前でしばらく躊躇^{ためら}っていた。

番地は教えられた住所で合っている。

1Fということは一階という意味で、このビルの二階から上はマンションで一階はコンビニだけだ。

住所が間違っているのかと思つたら、ビルの横に細い道があつて住宅街に続いている。

行つてみると、表札のない扉がぽつんとあつた。

コンビニの勝手口ではないかと思つたくらいだが、それにしては入口^{エントランス}がちよつと凝っている。

扉を通りから離すように一階部分が少しえぐつて建てられており、扉の上にささやかな庇^{ひし}がつけられ、二段しかない階段は煉瓦^{れんが}で飾られている。

階段の横には小さな庭——と言えるのかどうか、

小振りの煉瓦と柵でわずかな土が囲われ、数種類の小さな草花が植わっている。

ここで間違いないはずだが、看板も出ていない。曇り硝子^{ガラス}の扉にも何も書かれていない。

呼び鈴もない。

お客を迎える雰囲気ではないが、ここが事務所であるなら勝手に入つていいものと判断して、そつとドアを引いたところ怒声^{どせう}がした。

「どういふことよッ！ 話が違うじゃないの！」

あまりの剣幕に反射的に扉を閉めようとした手が次の台詞で止まった。

「有名な探偵事務所なんですよッ！ ここへ頼めば何でも無罪^{むざい}にしてくれるんじゃないか？」

これは聞き流せなかった。

江利は扉をかすかに開けたまま聞き耳を立てたが、わざわざ『盗み聞く』必要もなく、表通りまで響き渡るような大音量の金切り声^{かみきりこゑ}が叫んでいる。

「うちの卓^{すくも}ちゃん^{そそのか}は悪い仲間^{仲間}に唆^{そそのか}されて盗みにつ

きあわされただけじゃないの！ それなのに懲役五年だなんて納得できないわ！ あんたたちの力で何とかしなさいよッ！」

隠れているのも馬鹿馬鹿しくなつて、江利は思いきつてもう少し扉を引いて、そつと中を覗いてみた。

中はごく普通の事務所のようで、叫んでいるのは（声からも明らかだった）中年の女性である。

入口に背を向けて座っているので顔は見えないが、髪はきちんとセットされているし、着ているものも高級なブランド品だ（ただしサイズは間違はなく、それよりはちきれそう）。裕福な女性のようにだった。

怒鳴られているのは低いテーブルを挟んだ正面に座っている若い男だった。大学生のように見えるが、一応スーツ姿でよれよれのネクタイを首から下げているところを見ると社会人らしい。Lサイズ女性の剣幕を恐れてひたすら小さくなつており、その隣に秘書然とした若い女性が座っている。

「お言葉ですが、それは小日向さまの勘違いです」

口を開いたのは女性のほうだった。

「当方は探偵事務所ではございませんし『何でも』無罪になどできるはずありません。お話を伺つた限りではご子息に非があることは明らかです。盗み目的で夜中に他人の住居に侵入し、抵抗した住人に重傷を負わせています」

「卓ちゃんのせいじゃないわよ！ そのお爺さんが大げさに騒いだりするからいけないんじゃないの！ いきなり大声を出したから卓ちゃんはびっくりしてお爺さん突き飛ばしただけで怪我をさせるつもりなんかなかったのよ！ お爺さんが転んだはずみで骨折したからって卓ちゃんのせいじゃないわ！」

すごい理屈に江利は感心した。

呆れたのは江利だけではないようで、その女性は『落ち着いた』を通り越した冷やかな声で言った。

「ご子息には以前にも逮捕歴がありますね」

Lサイズ女性の声量はさらに跳ね上がる。

「それだって喧嘩に巻き込まれただけよ！ 警察は

その時はちゃんと卓ちゃんを返してくれたんだから今回だって返してくれたっていいはずじゃないの！
なのにたまたま卓ちゃんが執行猶予中だからって、今回は実刑は免れないなんてひどいじゃない！」

執行猶予中に強盗傷害？

呆れるのを通り越して驚いた江利だった。それは駄目だろう——と法律の素人の江利でもわかるのに、息子命の母親にだけはわからないらしい。

学生のような男がここで初めて口を開いた。

「それで刑務所に行かずに済ませようっていうのは、どう考えても無理じゃないかと思えますけど」

『やる気がない』『覇氣がない』『面倒くさい』をそのまま声にしたような、ぼそぼそした口調だった。

ちよっぴりげんなりしているような響きもある。

Ｌサイズ女性に辟易へきえきしているのは明白だったが、言葉自体ははっきりしたもので眼も逸そらさなかった。かなり露骨にいやそうな眼を向けて、もう帰ってくれないかなという意志も顕あわに男は続けた。

「執行猶予中に強盗傷害でしょう。それじゃ実刑になりますよ。わざわざ来てもらったのに何ですけど、お役に立てることはなさそうです」

「そんなはずないでしょ！　ちゃんと聞いたのよ！　放火で逮捕されたのに、ここに頼んで無罪になった人がいるって！　だったら傷害でも強盗でも無罪にしないよッ！」

「無理です」

また若い女性が言った。化粧も服装も地味だし、髪は無造作にまとめているだけなので目立たないが、きれいな女性である。ちゃんと化粧して着飾ったら女優かモデルと言ってもおかしくない。

「小日向さまがおっしゃっているのがどなたなのかわかりかねますが、放火で逮捕されたにも拘かわらず無罪放免された方がいるとしたら、それはその方がもともと罪を犯してはいなかったから——つまりは誤認逮捕であり冤罪えんざいだったからです。ご子息の例と一緒にすることはできません」

「何を言うの！ 卓ちゃんだつて冤罪よ！」

江利はちよつと恐くなつてきた。

親馬鹿という言葉があるが、ここまでくると笑えない。親馬鹿を通り越して常軌を逸している部類に入るが、きれいな女性はいくまで淡々と、しかし毅然と対応している。

「残念ですが、当事務所では小日向さまのお力にはなれそうにありません。どんな探偵事務所でも無理でしょう。この状況でもご子息を無罪にすると請け負う奇特な弁護士に依頼されることをお勧めします。どうぞお引き取りください」

穏やかではあるが凄みの籠もった声に、さすがに中年女性もこれ以上は言つても無駄と知ったのか、豊かな身体を揺らして憤然と立ち上がった。

「覚えてなさい！ 繊細な卓ちゃんが刑務所の中でいじめられでもしたらあんなたちのせいですからね。呪つてやる！」

ぎんぎん喚きながら女性がこっちへ来たので、

江利は慌ててのけぞった。

そんな江利には気づかず、女性は思いつき扉を押し開け、猛然と歩き去つたのである。

扉が完全に閉まるのを片手で押さえ、江利は中の会話に今度こそ聞き耳を立てた。

薄く開いた扉の隙間から覗いてみると、若い男はげっそりとソファに座り込んでいた。

「今の人、名前なんて言つたつけ？」

「小日向静さんです」

「あれで「静」だなんて看板に偽りありだよ……」

たとえが決定的に間違っているが、言わんとするところはよくわかる。

男は盛大にぼやいて訴えた。

「ねえ、電話帳に電話番号を載せるのはやめようよ。あんなお客さんが来るんじゃ物騒でかわない」

「いいじゃないですか。今みたいに断れば」

「面倒くさいよ」

「所長。働く気があるんですか」

「ないよ」

江利は面食らった。これが所長？

二十六歳の江利より四、五歳若く見える。

それはともかく所長という立場にありながら働く
 気がないと言い切る神経も理解できない。

この事務所、本当に大丈夫だろうか、ますます
 心配になってくる。

「だいたい無理して働かなくなつてばく一人くらい
 食べていけるんだからさ」

女性がちよつぱり意地悪い口調で言つた。

「いつまでもあると思うな親と金って言いますよ」

「親はもういないよ、知ってるだろ」

「だからこそです。もういない親の金ならなおさら
 『いつまでもあると思うな』でしょうが。ご両親の

遺産に頼り切るのは褒められたことじゃありません。

第一わたしのお給料は事務所の売り上げから出して
 いただくお約束なんです。大家さんの手前、少しは
 勤労意欲を見せないとまずいんじゃないませんか」

所長は気まずそうに眼を逸らして、わざとらしく、
 また嬉しそうに言つたものだ。

「もうじきお昼だ。休憩中の札を出そうよ」

「あれだけお菓子を食べてるのに、よくまあお昼が
 入るもんですね」

「何言ってるんだい。甘いものは別腹じゃないか。

お菓子はお菓子、ご飯はご飯だよ」

「四十歳を過ぎてから、せいぜいメタボで苦しんで
 くださいね」

本人に聞こえるように堂々と言いながら、女性は
 休憩中の札を出そうと扉を開け、そこに立っていた
 江利とぼったり顔を合わせる羽目になった。

女性はちよつと驚いて眼を見張り、江利は咄嗟に
 話しかけていたのである。

「……ここはもものきさんの事務所ですか」

「さようでございます」

「雉名弁護士から紹介されて来ました。すみません。
 お電話してから来るつもりでしたけど、気が急い

しまつて。今お邪魔してもよろしいですか？」

女性は背後を振り返つた。所長は慌てて首を振り、指で小さく×印をつくつてゐる。

顔を戻した女性はにつこり笑つて言つた。

「どうぞ、お入りください」

先程まで中年女性が座つていた場所に案内される。向き合つて立つと、所長は妙にあたふたしていた。

江利はさっきの女性のように攻撃的な態度でゐるわけではない。第一まだ何も言っていない。

それなのに何故か腰が引けている。

「椿江利です」

江利が差し出した名刺にろくに眼を通そうとせず、所長は自分も名刺を差し出してきた。

「あ、どうも……。こういうものです」

交換した名刺を見て、江利は少し戸惑い顔になり、訝しげにその名前を口にした。

「百之喜、太郎さん、ですか？」

ちゃんと『百之喜』と『太郎』の間にスペースを

空けて、アルファベットの仮名も振つてある。

でなければまず読めない苗字である。

自分の椿という名も滅多にあるものではないが、つい言つていた。

「珍しいお名前ですね」

「はあ、なかなか読んでもらえない苗字で。ほくも、うちの親戚以外知りません。読み仮名を振らないと、『ひゃくのさん』か『ものさん』と読まれることもしょっちゅうで、そうすると自動的に名前のほうは喜太郎さんって読まれちゃうんです」

へらへら笑うその様子が頼りなく見えたとしても誰も江利を責められないはずである。

ソファに腰を下ろした江利はちよつと心配そうに、同時にちよつぱり皮肉な口調で言つたものだ。

「百之喜さんはずいぶん若い探偵さんですね」

「いえ、ほくは探偵じゃないんです。それに今年で二十七なんです、そう若くもないですよ」

「そうなんですか？」

江利は軽く驚き、素直な感想を述べた。

「見えませんね。年下かと思いました」

「よく言われます。椿さんはいくつなんですか？」

応対してくれた女性が『女性に歳を訊く無礼者がどこにいる』とばかりに剣呑な視線を投げつけても、脳天気な性格らしい百之喜は気づかない。

「二十六歳です。——あの、百之喜さんは探偵じゃないんですか？」

「はい。電話帳には『調査会社』で載せてますけど、今は探偵業を始めるには届けがあるんです。届けを出さないで探偵と名乗ると違法になっちゃうんです。うちは届けを出してないんで探偵じゃありません」
他人事ひとことのような百之喜の口調に、江利はますます面食らった。

「では、こちらのお仕事は……何なんですか？」

「基本は何でもやってます。ぼくと鳳華おおかくんだけの事務所ですから浮気調査なんかはできないですけど。あ、でも、便利屋でもないですよ。犬の散歩とか、

粗大ゴミの回収とか、家の整理とか、そういうのは手が掛かるからやってないんです。——あ、それと一応お断りしておきますけど、別れさせ屋とかいう仕事もやってないですからね。時々、電話でやってないかって言われるんですけど、あれってあんまり褒められた仕事じゃないでしょ？ そりゃあ中には夫と浮気相手を別れさせたいんだなんていう切実な相談もありますし、父の遺産を相続した母を騙して財産を巻き上げようとしている男を何とかしてくれなんて同情できる相談もありますけど、そういうの期待されても困っちゃうんですよ」

この男にそんな仕事はやれと言っても無理だ。

「具体的には何をなさっているんです？」

「えーと、何と言われても、何なんでしょうね」

所長本人が真面目に首を捻ひねっている。

江利も非常に困惑していた。

弁護士ひんごしの雉名は歳は若くても、刑事事件を得意とする有能な弁護士だと聞いている。

江利が会って話した時もそのとおりの印象だった。その雉名がなぜこんな、見るからに頼りない探偵もどきに会ってみてはどうかと勧めたのか――。

一縷^{いさ}の望みを託してここまでやって来たのだが、やはり駄目かと絶望的な気分になった。

会話が途切れる。

きれいな女性は事務所の角にある台所で、お茶の支度を始めていた。ここからは様子が見えないが、茶器の音からして緑茶ではなく紅茶のようである。

なかなか戻って来ない。ティーバッグは使わずに、ポットを使って本格的に淹^いれているらしい。

間が持たないことに焦^{あせ}ったのか、百之喜は唐突に尋ねてきた。

「それで、どういうご用件でしょうか？」

「雉名さんから聞いていないんですか？」

江利が意外そうな失望の表情を浮かべたのを見て、百之喜は小さくなって頭を掻いた。

「すみません。雉名から連絡があったこともさつき

聞いたばかりでして……いえ、実は、さっきの人がそうじゃないかと思つてたんです。だから何か話が変だなあつて……」

「変でもないですよ」

江利は百之喜を見つめて言った。

「わたしも確実に有罪になる弟を何とか無罪にしてもらえないかと、こちらにお願いに来たんです」

百之喜はぎよつとした。

「弟さん？」

「そうです。弟は黄瀬^{きせ}隆^{たかし}と言つてわたしとは二つ違いの二十四歳になります。二年前に大学を卒業し、精密機器製造会社に勤めていました」

百之喜は妙にそわそわし始めた。

今にも席を立つて逃げ出しそうな様子だったが、かろうじて踏み止まつて恐る恐る質問してきた。

「つまりそのう、弟さんは何かの容疑で逮捕されて、既に起訴されているわけですか」

「もうじき初公判です」

「……で、あなたはそれに納得していない？」

「もちろんです」

「でも……でもですよ、公判が開かれるってことは弟さんは自供したんじゃないんですか？」

「したんじゃないません。させられたんです」

「では……そのう、訊きにくいことを訊きますけど、弟さんの容疑は？」

「殺人です」

今度こそ百之喜は『うげえ』と言わんばかりの、いやそうな顔になった。

台所からあの女性が睨^{にら}みを利かせていなかったら本当にそそくさと席を立てていたかもしれない。

その様子を見て江利にははっきりわかった。この男は面倒事がいやなのだ。内心の怒りを押し殺した低い声で江利は続けた。

「一日中、取調室に閉じこめられて、何度も何度もおまえがやったんだろうって頭から決めつけられて、弟は心身ともに疲れ果ててとうとう自白^{じはく}供述調書に

サインしました。検察でも同じようにしたそうです。その時の自分は正常な判断能力を失っていたと弟は言っています。氣力を取り戻した後は自白を翻して、自分は絶対やっていないとはっきり言っているのに、警察も検察も弟の言い分に耳を貸そうとしません。自分たちで強要しておきながら、一度自供した以上調書は覆^{つがえ}せない、これは立派な証拠だと繰り返すばかりで取り合おうとしません。このままでは弟はやつてもいない罪で刑務所に行くことになります。ですから、これが冤罪だと証明して欲しいんです」

探偵（もどき）への依頼としてはかなり変わった内容である。江利の言うようにこれが冤罪なら目も当てられないが、今し方の静のような例もある。

確認を取る意味でも、百之喜は少々疑わしそくに尋ねてきた。

「ですけど、根拠がなければ逮捕状は出ませんし、検察も起訴しませんよ。何か弟さんに不利な事実があったんじゃないんですか？ 現場^{ゲンバ}不在証明^イがない

とか、目撃者がいるとか、物的証拠があったとか」

「全部です」

「ぜ……」

百之喜は呆気に取られた。

「全部ですか？ アリバイがなくて、目撃者がいて、物的証拠があったんですか？」

これで不当逮捕と言われたのでは警察も立つ瀬がないだろう。

それどころか、取り調べ中の自白の強要が問題視されている昨今これほど堂々と送検できる被疑者は非常にありがたい存在だったに違いない。

自白の強要と江利は言うが、警察にしてみれば、黙秘を続ける被疑者の口を割らせただけのこと、むしろ当然の職務を遂行したまでである。

裁判で犯行を否認しても、これだけの証拠がある以上、警察の知ったことではない。検察にとっても反省の色がないという理屈をつけて懲役を科す材料にできるのだから、願ったりかなったりだ。

「えーと、それじゃあ、動機もあったんですか？」

「警察はそう思つて……いえ、決めつけていますが、弟は人殺しなんかできる人間じゃありません」

それで片づけば苦勞はないので、百之喜は途方に暮れた様子で言つた。

「椿さん。お気持ちはわかりますけど……」

「あなたの言いたいことはわたしにもわかります。

犯人の——特に殺人犯人の身内は判で押したようにそう言いたがるものだと言うんでしょう」

冷やかな口調に百之喜は氣まずそうな顔になり、素直に謝つた。

「すみません。何度も言われてるんですね……」

「ええ。耳にたこができるほどね」

「じゃあその冤罪だとして、弟さんは誰を殺したと思われてるんですか？」

「百之喜さん。その前にお尋ねしますが、わたしの依頼を引き受けてくれるんですか」

眼の前の男があまりに頼りなさそうに見えるので、

江利の口調も自然ときついものになる。

必死に訴えても鼻であしらわれ、気の毒な姉だと哀れみの眼を向けられ、結局は理解してもらえない、あの虚しさを味わうのはもうたくさんだったのだ。

江利が百之喜の表情をじつと観察している様子を百之喜は睨まれていると感じたようで、見るからに絶体絶命の窮地に追い込まれている。

芳しい香りが漂い、女性がお茶を運んできた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

江利はきちんと礼を言つて茶器を取った。

江利に差し出されたのは高級なマイセンの茶碗で

百之喜のは百円均一のマグカップである。

露骨に所長がないがしろにされている。

一口含んで江利は微笑した。

「——美味しい。ダージリンですか？」

「いいえ、ネパールのお茶なんです。うちの所長が珍しいもの好きでして。——よろしければどうぞ」

女性は砂糖壺とミルクピッチャーを置き、江利はミルクだけを入れてみた。少し濃い目のお茶なので、おいしいミルクティーになる。

砂糖壺には一つずつ包装した角砂糖が入っていた。百之喜は角砂糖を三つも茶碗に入れて、ミルクもたっぷり注ぎ込んでいる。どんなにいいお茶でもこれでは本来の味が損なわれるのではと呆れるが、これも百之喜の緊張の現れだったらしい。

少しぬるくなつたお茶を一息に呑み干し、自分に気合いを入れるように背筋を伸ばして切り出した。

「ええと、椿さん。お返事なんですけど……」

盆を持つて下がろうとした女性が足を止めた。

背後に立つ彼女の表情は百之喜には見えないが、江利にはよく見えた。切れ長の眼がきらりと光り、何やら凄みを増して百之喜を見下ろしている。

振り仰いでこの顔を眼にしたら百之喜はそれこそ逃げ出したのではないかと思われるが、今の江利も百之喜もそれどころではなかった。

百之喜はせっかく伸ばした背筋を前以上に丸めて、
そわそわと指先を動かしている。

先程と違って百之喜は正面から江利を見ようとは
しなかった。多少は申し訳ないと思っているのか、
頑かたなに視線を逸らして弁解がましく言ってきた。

「弟さんは……本当にお気の毒だと思うんですよ。
ですけど、やっぱりその、証拠もあるわけだし……

警察の方針にしたって……尊重しないといけないと
思うんですよ。それに姪名は優秀な弁護士です。

そりゃあ、弟さんの場合だと無罪放免は難しいかも
しれませんけど、姪名に任せておけば安心ですよ。

そんなわけですから……ぼくにできることはないと
思うんですよ。ですから、そのう……」

引き受けられませんか——と、思いきつて百之喜が
言おうとした直前に背後の女性が動いた。

百之喜の頭を片手でぐいと横に押しやり、江利に
向かってにつこり笑いかけたのである。

「かしこまりました。椿さま。当事務所が椿さまの

ご依頼をお引き受け致します」

江利は驚いた。この返事にも女性の乱暴さにもだ。
呆氣に取られたが、女性は積極的話を進めた。

「椿さまの弟さんの無実を証明すること。ご依頼の
内容はそれでよろしいでしょうか？」

「え、ええ。もちろんです。——あの、引き受けて
くださるんですか、本当に？」

「風華くん！」

ソファに倒れそうなくらい頭を押された百之喜が
悲鳴を上げる。

「勝手に決めちゃ駄目だよ！ 所長はぼくだよ！」

「では所長。わたくしのお給料は？」

「それは、だからその……」

「椿さまのご依頼は当事務所でお引き受け致します。
よろしいですね？」

いやとは言わせない迫力である。

風華と呼ばれた女性は百之喜をソファの端に押し
やって隣に座ると、あらためて江利に一礼した。

「百之喜の秘書を務めております風華と申します。

よろしくお願い致します」

所長よりも秘書のほうが権力があるとは珍しいと思いがた、江利も頭を下げた。

「こちらこそ。——あの、失礼ですが、おうかとはどういう字を書くんですか」

「失礼致しました」

風華は苦笑して、名刺を差し出してきた。

その名刺の名前を見て、江利は軽く眼を見張った。

これまた滅多に見ない珍名だったからだ。

「花^{かしやういん}祥院風華さん——ですか？」

ぱつと見人名とは思えない。神社仏閣に属する御堂^{おどう}のようである。花祥院風華堂——ならなかなか立派で壮麗^{さうれい}な雰囲気^{おんけい}が想像できる。人名だとしても華道か茶道の宗家——悪くすれば怪しげな文筆家が占い師の名乗る芸名^{げいめい}のようだ。

「はい。ですが、名前で呼んでください」

「わかりました」

江利は言つて、ちょっと苦笑した。

「職業柄^が、名前を確認する癖^{くせ}があるものですから。わずらわしい思いをさせてすみません」

江利の名刺に顧客相談室オペレーターとあるのを見て、風華も頷いた。具体的な業務はわからないが、顧客相談室というからには人の名前の漢字と読みを念入りに確認する必要がある。その江利にとっても風華の名前は少々驚きだったらしい。

「初めて見ました。珍しいお名前ですね」

「大げさでしょう。この苗字で呼ばれるのは抵抗がある、いつも風華で通しているんです」

その名前もかなりの確率で大仰だと思う。

『鳳^{ほう}凰^{おう}の風に中華の華』では自己紹介も気がひける。幸いにも風華は『名は体を表す』を実践している美人だから問題はないだろうが、子どもの頃はどろどろだったのだろう。普通の女の子なら間違いなく名前負けとからかわれるはずだ。

それ以前に自分の名前が漢字で書けなかったの

はなからうかと他人事ながら気になってしまいが、
鳳華はさらりと言った。

「厄介な名前ですが、耳で聞く分には、たいていの人は『大岡』だろうと勘違いしてくれますので」

なるほど『かしよういんさん』と呼ばれるよりは、『おうかさん』のほうがまだ普通かもしれない。

しかし、字面も少々変わっている。苗字に『花』が入っているのに下の名前にも『華』が入っている。

普通はやらない組み合わせのような気もするが、一般的に女の子は結婚すれば苗字が変わるのだから、両親は深く考えなかったのかもしれない。

そうした思いが顔に出たかどうかは定かでないが、鳳華が先回りして言った。

「生まれた時は花祥院ではなかったんです。両親が離婚したのでこの名前になりました」

江利は軽く眼を見張って、微笑した。

「それなら、うちと同じですね」

百之喜が笑って手を打った。

「ああ、なんだ。それじゃあ椿さんは結婚したから弟さんと違う苗字になったわけじゃないんですね」

鳳華がまた冷たい眼差しで百之喜を見た。

江利の左手には結婚指輪がない。そのくらい気がつかないのか——と眼で詰（なぐさ）つても、鈍さにかけては筋金入りの百之喜は平気な顔でにこにこ笑っている。こまでくるといっそ立派だが、江利はひっそり微笑した。苦い記憶を思い出したからだった。

「結婚は、来年するはずだったんです。五年前からつきあっている彼と婚約したばかりでした」

「……とおっしゃいますと？」

「弟の事件の後、婚約を解消してくれと彼に言われました。人殺しの姉を身内にすることはできないと両親が言っているからと」

百之喜と鳳華は思わず顔を見合わせた。

よくある話と言ってしまえばそれまでだ。

男の両親にしてみれば、これ以上ない婚約破棄の理由だが、江利にしてみればたまったものではない。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。